

# I 章 研究の概要

## ＜研究主題＞

### 対話を通じた「思考力」の育成（2年次）

－「育てるカウンセリング」を生かして、個々の考えを広げ深める授業づくり－

#### 1 研究主題について

本校は、平成24年度より、「思考力」を育成するユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んできた。特別支援教育の考えを生かして、教材等を工夫し、すべての子どもの思考活動を保障する試みである。それは、ただ単に、思考にのみ焦点を当てた研究ではなく、学習指導要領に示されている「学力の3要素」、

○基礎的な知識及び技能 ○思考力、判断力、表現力等 ○主体的に学習に取り組む態度

を一体として捉え、「思考力」育成に向けて、知識・技能や学習意欲にユニバーサルデザインの働きかけを行う取り組みであった。

しかしそこには、教材と子どもとの関係を重視するあまり、子どもどうしの関わりが不十分になるという課題があった。そこで平成25年度は、前年度の課題を受け、子どもたちを関わらせ、学び合いを活性化することにも取り組んだ。ただ、後述するが、その取り組みは一定の成果を見つつも、なお課題を残すものとなった。このような過程を経て、本校では平成26年度より、この子どもたちの関わりを研究の中心に据え、とりわけ、ことばを介した関わりである「対話」に焦点を当て、「思考力」の育成に取り組んでいる。

対話とは一般に、「向かい合って話すこと。相対して話すこと。二人の人がことばを交わすこと。」（『広辞苑－第6版－』）を意味し、ことばを介して人と人とが関わることである。本校では、このような対話の、他者とことばを介して関わる働きに着目しながら、「思考力」の育成を図ろうとしている。それは、子どもたちが、それぞれの考えを友達と重ね合わせて一つの新たな考えを生み出したり、互いの違いを認めつつ自らの考えを形づくったりする等、学習集団の考えを収束させたり、拡散させたりする対話を通して、個々の考えを広げ深めていくことを目指すものである。

ここまで、本校の研究経緯を視点に研究主題について述べてきたが、次に、思考力育成に関する教育動向に目を向けてみたい。平成26年3月、国立教育政策研究所教育課程研究センターより、『資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理』が報告された。そこでは、これからの子どもたちに必要とされる「21世紀型能力」が、今後の教育課程や授業づくりに反映されていくことが求められている。この21世紀型能力は、基礎力・思考力・実践力の3層から構成されている。そして思考力は、その中核に位置づけられ、次のように定義されている。

一人一人が自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問いを見つける力

（国立教育政策研究所、『資質や能力の包括的育成に向けた教育課程の基準の原理』、2014年、vii頁）

ここからは、変化の激しい社会に対応するために必要な力としての思考力に、「他者」との関わりという要素が含まれていることが分かる。そして、この報告書の中では、資質・能力を育成するための授業づくりや教育課程編成の視点の一つとして、対話で子どもたちの考えを深めていくことの必要性が示されている。よりグローバル化していくこれからの社会においては、多様な考えをもった人々が、対話をしながら課題解決を図ることが必要であり、これからの時代を生きる子どもたちには、その力の育成が求められているのである。

また、平成26年11月には、文部科学大臣より、諮問『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』が出され、「アクティブ・ラーニング」ということばに注目が集まっているのは周知のとおりである。もともとは、講義形式に偏った高等教育の質的転換に向け、中央教育審議会で明示された<sup>\*1</sup>ものであったが、それが、初等中等教育においても、同様に求められたのである。すなわち、「アクティブ・ラーニング」を核に、小学校段階から大学に至るまで一貫して、主体的・協働的な学習を展開していくことが、これからの教育で求められているのである。そして、そのような模索の中で、平成27年9月の中教審のまとめでは、その冒頭に、「未来に生きる子どもたちに必要な能力」として、次の3点が示されている<sup>\*2</sup>。

- 十分な知識・技能
- 思考力・判断力・表現力等
- 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

ここで示された能力は、現行学習指導要領の「学力の3要素」が踏襲されている。ただ、「多様な人々と協働して」という点において、それがより発展的に捉えなおされている。思考力等と一体的に育成される態度として、他者との関わりの中で学ぶという側面が、初等教育から大学教育まで一貫して、今後さらに求められていくと考えられる。そして、このことは、学習指導要領改訂をめぐる「論点整理」で、「他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているか」<sup>\*3</sup>という視点が、学習改善の重要な視点の一つとして挙げられていることにも通じる。

私たちは、以上に述べてきたような、これまでの本校の取り組み、そして現在の教育動向を踏まえ、「対話を通じた『思考力』の育成（2年次）」という研究主題の下、その具体的な授業の在り方を模索しているところである。その際、本校では、「対話」を次のように定義し、実践に取り組んでいる。

#### ＜本校の対話＞

自己主張と他者受容に基づきながら、ことばを介して個々の考えを広げ深める、子どもどうしの主体的な関わり

\*1 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（答申）、中央教育審議会、2012年

\*2 『高大接続システム改革会議（中間まとめ）』、中央教育審議会、2015年9月、3頁より抜粋

\*3 この視点の説明として、「論点整理」では、次のように述べられている。

「身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教師と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。」中教審教育課程企画特別部会、2015年8月、18頁

また、私たちはこのような対話の成立に向け、教材や授業構成を工夫し、学習集団の中に対話への必然性を伴った多様な考えが表出されるよう試みている。各教科の問題解決過程で、自分の考えを伝えたい、友達の意見を聴きたいといった、考えを交わすに値する多様さがなければ、対話の成立は難しいからである。

## 2 研究副主題について

### (1) 対話と現代の子どもたち

「思考力」を育成する上で重要な役割を果たす対話ではあるが、現代社会では、人々が、主体的に自分の考えを関わらせ合うこと、すなわち本校が意図するような対話が困難な状況になりつつあると言われている。社会学者の土井隆義氏（筑波大学大学院教授）は、現代の人々は、人間関係が壊れることに対する不安が非常に高く、他者と異なる考えを述べず、相手に同調することで、他者との関係を保とうとしていると指摘している。氏は、このような現代社会の中にある子どもたちの関係を「やさしい関係」と呼び、「薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察知しながら、自分の出方を決めていかなければならない緊張感が漂っている」<sup>\*1</sup>関係であると言う。それは、本来のやさしさの意味とは異なるものである。

実際の学習場面における子どもたちの意識は、どうであろうか。全国学力・学習状況調査における質問紙調査では、平成25年度、新たにコミュニケーション能力に関する五つの質問が加えられた。その中の一つに、「一人一人の人間には考えや性格などに違いがあるということを大切にしている」という質問があり、約91%が「当てはまる」と回答している。このような結果からは、他者に同調しようとするやさしい関係は見えてこない。しかし、

#### 平成25年度 質問紙調査結果【全国】

- 「一人一人の人間には考えや性格などに  
違いがあるということを大切にしている」……………約91%
- 「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意」……………約50%

「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意」という質問に、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」と回答している児童は、約50%である。一人一人の考えの違いが大切であることを認めながらも、実際には、自信をもって、自己を打ち出すことに、約半数の子どもたちが、困難を覚えていることが伺える。この割合は、平成26・27年度も、ほとんど変化していない。

このような質問紙調査の結果から見える子どもたちの姿は、先に述べた「やさしい関係」へと向かっていると言われる子どもたちの姿と符合するのではないだろうか。

本校の子どもたちは、どうであろうか。研究を始めるに当たって、平成26年度4月に行ったアンケート<sup>\*2</sup>の問い「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意ですか」に、「当てはまる・どちらかと言えば当てはまる」と答えた子どもは約60%であり、全国平均よりやや高いものの、本校においても、半数近くの子が、自分の考えや意見を発表することに肯定的ではないことが分かった。前回の第97回研究発表会での参会者アンケートや授業討議では、「子どもの発言が少ない。」「声が小さいのが気になった。」「なかなか発表ができない子がいた。」「友達の誤答に、『え〜。』と児童が反応したため、発表者が最後まで発言を続けること

\*1 土井隆義著、『友だち地獄』、筑摩書房、2013年、9頁

\*2 全国の質問紙調査の項目は、全体を3分割して各学校に割り当てられた。本校では、「コミュニケーション」の項目が割り当てられていなかったため、同様の質問紙調査を学校独自に実施した。

ができなかった。」といった、自己主張と他者受容が十分ではないことを、少なからずご示唆いただいた。

これらのような点から、本校の子どもたち、そして多くの現代の子どもたちにとって、たとえ、問題解決過程において、多様な考えが表出されるように働きかけたとしても、主体的にそれらに関わらせる対話へと向かうことが難しい状況にあることがうかがえた。「思考力」育成に必要な対話が展開されるよう働きかけていくことが、私たちにとっての課題であったのである。

## (2) 「育てるカウンセリング」を授業づくりに生かす

このような課題に対し、私たちが、働きかけの手がかりとしたのが、「育てるカウンセリング (Developmental Counseling)」である。育てるカウンセリングとは、次に示すようなものである。

…ブロッガーらによって、第2次世界大戦後に提唱されたカウンセリングの一つの立場であり、それまでのカウンセリングは、不適応状況に陥ったり、問題行動を起こす子どもへの治療・矯正的カウンセリングが主であったのに対して、子どもたちの発達のな面に注目して、現在ある状態よりも、さらに一人一人の全人的な発展・向上を目指すカウンセリングとして出発したものである。… (中略) …  
具体的な方法としては、個人面接にとどまらず、グループエンカウンターやグループカウンセリング、進路相談等をあげることができる。 (『学校カウンセリング辞典』, 金子書房, 1995年, 31頁)

育てるカウンセリングとは、治療的ではなく発達を促進し、育て高めるという働き、そしてグループエンカウンター等に見られる「心とこころのふれあいを深め、自己の成長を図ろうとする」<sup>\*1</sup>働きをもつものである。一般的に「カウンセリング」ということばからイメージされる「治療的なカウンセリング (Therapeutic Counseling)」と比較しながら、育てるカウンセリングの主な特徴を見てみたい。

治療的カウンセリング		育てるカウンセリング
治療を要する子ども	対象	健全なすべての子ども
面接の時間	位置づけ	全教育活動
個人面接	方法	集団への働きかけ
病理行動の除去・緩和	目的	発達課題を解決し、成長を援助する

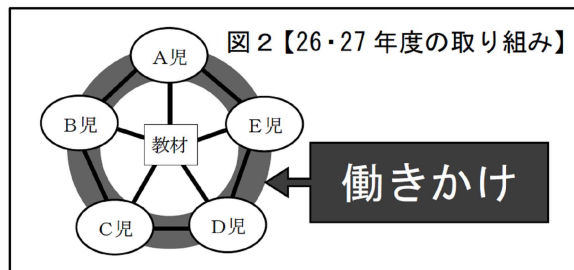
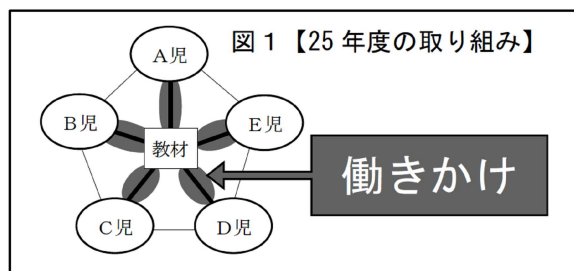
育てるカウンセリングは、心理的な側面へと働きかけていく点では、治療的カウンセリングと同様であるが、この表<sup>\*2</sup>にあるように、集団を対象に働きかけを行っていくものである。前述した「やさしい関係」のような、現代の子どもたちが抱えている課題は、個と個が影響し合っている集団の中で生じているものであり、その集団へと働きかけることを目的としている育てるカウンセリングは、対話を促進させるのに有効なものである<sup>\*3</sup>。

\*1 國分康孝編、『カウンセリング辞典』, 誠信書房, 2012年, 174頁

\*2 國分康孝著、『教育カウンセリング概説』, 図書文化社, 2009年, を基に作成。

\*3 日本教育カウンセラー協会編『教育カウンセリング標準テキスト』には、「対話のある授業」が、育てるカウンセリングが扱う領域の一つとして示されている。

平成25年度、私たちが手がかりとした特別支援教育の考えは、文字や図といった教材への個の認識をどう促進するかということが中心となっていた。したがって学び合いを活性化する働きかけも、教材を簡略なものにして分かりやすくする等、「教材と子どもの関わり」に働きかけ、その結果、間接的に子どもたちの関わりを促進しようとするものであった\*1（図1）。一方それに加えて、平成26年度より新たに手がかりとしている育てるカウンセリングは、集団における「子どもと子どもの関わり」を対象とし、それをより良いものにすることを目的としている。したがって、その働きかけは、直接的に子どもどうしの関わり、集団の形成を促進するものとなる（図2）。



その際、育てるカウンセリングが集団を対象としているということは、個よりも集団が優先されるということではない。よりよい集団形成によって、個の成長を促すことが、最終的に目指されているところである。

この、集団を対象とした育てるカウンセリングには、例えば次のようなものがある。河村茂雄氏（早稲田大学教授）は、傷つくことや失敗することを恐れて、新しいことに取り組もうとしない子どもたちに、事前に次のような対応をしておくことを勧めている。

- ・みんなで取り組むときに、人を傷つけるような言い方をしないように、事前にしっかり確認する。
- ・取り組みのなかに、取り組んだ過程を評価しあう場面を設定する（結果だけではなく、取り組んだ過程も大事なことを理解させる）
- ・うまくできなかったときにどうするのかという対処策、または逃げ道を用意しておく

（河村茂雄著、『教師のためのソーシャルスキル』、誠信書房、2012年、71頁）

「人を傷つけるような言い方をしない」「うまくできなかったときにどうするのか」とあるように、育てるカウンセリングは、友達との関わり方、いわば対話における技能を子どもたちに身に付けさせていく上で、多くの示唆を私たちに与えてくれるのである。

また、水上和夫氏（公立校スクールカウンセラー）は、発言者への関わり方や、異なる考えを発言した子どもへの対応について、次のように述べている。

全体で意見を交流する場では、個々の発言をあたたかい雰囲気でも共有できるようにする。教師は、発言者の表情がよく見える位置に立ち、動揺したり、変化したりする子どもの反応を素早く読み取る。聞き手の笑顔やうなずきなど、発言者を肯定する非言語サインを「…しているね」と言葉でフィードバックする。

また、少数意見や否定的意見の背景をくみ、「〇〇ということが言いたかったんだね」「よく言えたね」と肯定的にリフレーミングする。このようにして安心して率直な感情交流ができる雰囲気を保障する。

\*1 詳細は、本校第97回教育研究発表会研究紀要23頁を参照。

(岸俊彦，水上和夫，大友秀人，河村茂雄編，『意欲を高める・理解を深める対話のある授業－教育カウンセリングを生かした授業づくり－』，図書文化社，2013年，76頁)

ここでは、「個々の発言をあたたかい雰囲気でも共有できるようにする」「安心して率直な感情交流ができる雰囲気を保障する」とあるように、育てるカウンセリングの考えからは、対話における雰囲気を形成する際にも、多くの示唆を得ることができると私たちは考えている。

本校の取り組みは、このような育てるカウンセリングを生かして、「思考力」育成へと向かう対話を促進しようとするものである。また、その際には、対話の基盤となる、一人ひとりの子どもの他者への関わりが、学級集団の中でどのような状態にあるのかを、教師の観察やQ-U<sup>\*1</sup>等の質問紙調査を基に把握しておくことが必要不可欠であると考えられる。

以上、研究主題・副主題について述べてきた。これらを、研究の視点として整理すると、以下ようになる。研究の具体的な内容については、次章以降で述べていくこととする。

#### ＜本校の研究の視点＞

- 各教科・各単元で育成を目指す「思考力」に必要な対話を設定する。
- 対話へと向かう多様な考えが表出されるよう、各教科の教材や授業構成を工夫する。
- 育てるカウンセリングを生かして技能や雰囲気を高め、対話を促進する。

\*1 QUESTIONNAIRE-UTILITIESの略。河村茂雄氏を中心に考案された、学級集団をアセスメントし、より適切な支援をするための補助ツール。詳細は、本誌25頁を参照。